

2023 年度入学式 式辞

皆さん入学おめでとうございます。神戸松蔭女子学院大学の教職員を代表して、心よりお祝い申し上げます。ご列席いただいたご家族、関係者の皆様にも感謝申し上げます。

本学の入学式ですが、すでにお分かりのようにキリスト教の礼拝形式で行っています。本学の歴史は、今から 131 年前の明治時代中頃に、イギリス人宣教師が設立した松蔭女学校にさかのぼります。今も我々は、入学式や卒業式といった行事を礼拝形式で行っています。また、キリスト教について学ぶ授業もあります。当然ですが、キリスト教の信仰を強制するものではありません。キリスト教の形式に慣れない人は、外国の文化を体験するような、新鮮な気持ちで好奇心を持って経験してもらえればと思います。これからしばらくの間、神戸松蔭という文化の中で過ごすことになったわけですから、入学式だけでなく、礼拝やクリスマス行事を体験してみてください。

本学のようなキリスト教の教育機関や教会が多いことは神戸の特徴の一つです。大学から六甲駅まで歩いて降りる道沿いにも、六甲カトリック教会と神港教会という二つの教会がありますが、今まさに両教会の桜が満開でとてもきれいです。帰り路でぜひ目を止めてください。

先ほど、本学は 131 年前の松蔭女学校から出発したと言いましたが、その歴史の中で中学・高等学校になり、次いで短期大学や 4 年制大学を創設しました。現在は学校法人松蔭女子学院が松蔭中学・高等学校と本学を運営しています。その松蔭女子学院のモットーを紹介したいと思います。それは、「一粒のからし種」です。からしの種が一粒ということです。なぜ、からし、なぜ、一粒の種、と思った人も多いでしょう。聖書にあるイエス・キリストの言葉に由来しています。

「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る」

(マルコによる福音書 4 章 30 - 32 節)

すなわち、小さな種でも、姿かたちを変えながら成長し、やがて鳥が枝に巣を作るほどの木になるという意味です。日本のからしは、木というより草で、鳥が巣を作るほどの大きさには成長しません。イエス・キリストの時代は二千年ほど前ですし、場所は中東地域ですから、日本のからしとは別の種類と思われます。いずれにしても、一粒のからし種という言葉は、大きく成長する可能性を持つ小さな種を表しています。

大学モットーは、その小さな種が大きく成長することを期待して” **Open Yourself, Open Your Future**” としています。Open Yourself は、自分を解放すること、Open Your Future は自分の未来を拓くことです。すなわち、学生の皆さんが、無意識のうちに自分を閉じ込めてきた殻を破って自分を解放し、心を開いて成長し、卒業後の未来を切り拓いていくことを期待するとともに、私たち教職員が皆さんの成長の手助けをすることを示しています。

この大学モットーに関わる話を少ししたいと思います。昨年、140年ぶりという大きな法律の改正がありました。皆さんに直接関係しているのでご存知でしょうが、成年年齢に関する民法改正、すなわち成人とされる年齢の20歳から18歳への引き下げです。18歳から、親の同意を得ずに様々なことを自分で決めてよいということになりました。なぜ、このような法律の改正が行われたのでしょうか。若い人たちがしっかりしてきたので、18歳を成人として大丈夫ということになったからでしょうか。

法務省のQ&Aには、選挙で投票できる年齢を18歳としたことや多くの国が成人年齢を18歳としているからといった理由が挙げられています。そもそも投票できる年齢を18歳とした理由について政府の広報サイトでは、高齢化が進む中で若い世代の意見を政治に反映するためや世界的に18歳からが多いといった説明がされています。また、18歳や19歳が殺人などの凶悪な事件を起こしても、少年として匿名報道されるなど保護されているのはおかしいという意見が多くなったことが影響しているという新聞報道もあります。若い人たちにしっかりしてきた人たちが増えてきたからという理由ではないようです。

そもそも、ある年になればしっかりした判断が自動的にできるわけではありません。私は子どもの頃、大人になれば自然に色々なことをしっかり判断できるようになるものだと思っていました。しかし、今の私はその時の私に、そんなことはないと自信を持って言うことができます。大人になって、それどころか成人を3回迎えてさらにおつりがくるという年齢にまでなっても、何らかの判断をしなければならぬ時は、判断に自信を持てずいつも不安でいっぱいになりながら、とにかく決めなければならぬから決めていきます。ただし、仕方なく、自信なくであっても、判断するということを繰り返しているうちに、以前よりは多少は物事を判断できるようになってきた気がします。

こんなことは、成人を3回迎える年齢にまでならなくても、皆さんの中でも、高校時代にクラブの部長や生徒会の役員といった責任ある立場になった人はすでに実感しているのではないかと思います。つまるところ多少なりとも大人になれるかどうかは、年齢の問題ではなく経験の問題です。自分は頼りない、成人となったらしいけどとても色々なことを決める自信は無いと思っている方もいると思います。そのような人こそ、大学時代に、悩みながら判断するという経験を積んでほしいと思います。

私たちが成人年齢に達してからも、悩みながら判断するという経験を積む必要があるのは、今の社会の在り方とも関わっています。今の若い人は頼りない、昔はもっと若いうちから独り立ちしていた、という意見を聞くことがあります。しかし、いつから大人とみなすかは、個人の成長だけの問題ではなく社会の在り方が関係しています。昔、例えば江戸時代以前を考えると見れば、どんな職業についてどんな生活を送るかはだいたい決まっていました。農民の子どもは農民、武士の子どもは武士というように親と同じ仕事をするのが一般的でした。また、生活の仕方や地域社会のルールも世代を超えて同じように受け継がれていました。

すなわち、自分が大人になったら何をしないといけないかは、子ども時代に周囲のおとなを

見ていけば自然と身に付いていきます。変化の少ない社会では、学ぶべきことが比較的はつきりしており、今より早くに大人になることができました。悩んで判断する必要が少ないシンプルな社会と言えます。ただし、見方を変えれば、職業や生活の仕方があらかじめ決まっている不自由な社会です。

それに対して現代は、たいへん大きな自由を与えられた社会です。職業や生活の仕方を自分で選択できる分、悩んで判断しなければならない機会が増えました。そして、生活の仕方や仕事の仕方の変化も昔とは比べ物になりません。私が子ども時代に周囲の大人を見て学んだことが、すべて今役に立たないという訳ではありませんが、当時なかったパソコンが仕事に不可欠になり、スマホが生活に不可欠となっています。スマホの使い方は、私が子どもに教えるのではなく、私が子どもから教わりました。

昔に比べて今の成人は、というよりも、成人という言葉の持つ意味が変わってしまったと考えるべきでしょう。今の時代は、成人した後もさらに学び続けて変化に対応していかなければなりません。面倒と言えば面倒ですが、変化している社会であるからこそ、とても便利で豊かな社会となっています。いつまでも一人前になれない社会とも言えますが、成人した後も自身の興味や関心を広げることのできる社会、能力を高めて可能性を広げていくことのできる社会、いわば子ども時代が延長された社会と考えることができます。

とはいえ、子ども時代が延長されたからと言って、いつまでも本当に子どもという訳にはいきません。どこかで自分で様々なことを決めて責任も取るようにしていかなければなりません。18歳という年齢としたのは、多くの国が18歳を成人としていることや、今の日本ではほとんどの人が18歳まで教育を受けて、そこから進路が分かれるという区切りの年齢になっているからでしょう。18歳は大人という終点ではなく、これから自分自身で色々な判断をしていながら経験を積んでいく出発点と捉えることができます。

18歳になったからと言って突然大人になれるわけではないことを考えると、大学生という、成人になって自分自身で選択できる権利を持ちながら、様々なことに挑戦して経験を積んでいくことができる期間があるのは、とても意味があると思います。

大学モットーの”Open Yourself, Open Your Future”は最初に述べたように、無意識のうちに自分を閉じ込めてきた殻を破って自分を解放し、心を開いて成長し、未来を切り拓いていってほしいという意味です。皆さんは、自分はまだ大人になったからこんなもの、自分にはしよせん無理といった殻を作ってしまったていないでしょうか。皆さんはまだ一回目の成人を迎えたに過ぎません。これからさらに、二回、三回、四回と成人を迎えるだけの時間を持っています。様々なことに挑戦して、自分の可能性を拓いてください。私たち教職員はできるだけサポートをしていきます。

2023年4月1日 神戸松蔭女子学院大学 学長 待田昌二